

並立助詞「と」と「や」の機能的相違

渡 邊 ゆかり

要 旨

日本語教育の現場では、初級の学習者に並立助詞「と」と「や」の相違を説明する際、「と」は「すべて列挙」に用い、「や」は「一部列挙」に用いるものとして説明されることが多い。しかしながら、先行研究において指摘されているように「や」は「すべて列挙」に用いられることもある。従って、本稿においては、主に「すべて列挙」に用いられる「と」と「や」の機能的相違について考察を行った。その結果、両者の間には、「すべて列挙」の「と」は、並立要素の総和集合に、並立要素と「と」からなる成分の構文的意味を付与し、「すべて列挙」の「や」には、並立要素をすべての具体例とする類包含カテゴリーに、並立要素と「や」からなる成分の構文的意味を付与するという機能的相違が存在することが明らかとなった。

【キーワード】並立助詞、「と」、「や」、総和集合、類包含カテゴリー

1. は じ め に

「机の上に本と鉛筆がある」、「机の上に本や鉛筆がある」といった、並立助詞として用いられる「と」と「や」の各々の機能について考察している主な先行研究には、生田目（1988）、吉井（1989）、寺村（1991）、市川（1991）、安藤（2001）がある。

これらのうち生田目、寺村は、「と」は「すべて列挙」に用い、「や」は「一部列挙」に用いる、とみなしている点で一致している。

これに対し、市川、安藤は、「や」に「すべて列挙」に用いられるものも存在することを指摘し、この理由について分析しているが、いずれにおいても、なお問題が残る。

また、吉井は、「と」と「や」の相違を示す概念として「一体性」と「個性（離散性）」という概念を提示しているが、具体的な機能的相違についてまでは言及していない。

従って、本稿においては、これらの先行研究をふまえつつ、並立助詞として用いられる「と」と「や」の機能的相違を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

並立助詞の「と」と「や」は、いずれも同一格の要素を列挙するという機能を有しているが、列挙の仕方は、同一ではない。

生田目は、「と」を「並べた語以外のものを含まない場合」に用いる並立助詞に分類し、「や」を「多数の事物の中からいくつかを例示的に取り上げて並べ、取り上げられていないものも同類であることを示す意を表す場合」に用いる並立助詞に分類している。

また、寺村は、「と」については、「(省略) 一般に、そのひとまとまりがある資格をもって、その文の構成要素として他の語と関係をもつ、その資格をもつものを全部あげる場合に使われる (p. 199)」と述べ、「や」については、「二つ以上の名詞を並立的に結び付けるのに『ヤ』が用いられるときは、それらの名詞が、あるセットの具体例として、そのメンバーの一部としてとりあげられていることを示す。先の『ト』が、そのセットのメンバーすべてをあげるのとは違って、『ヤ』は、そのほかにも同類のものがあるという意味を含んでいる。(p. 201)」と述べている。このような説明は、次の(1a)と(1b)の意味の相違を説明する場合には、有効である。

(1) a. 「机の上には、何が置いてありますか。」

「腕時計と辞書が置いてあります。」

b. 「机の上には、何が置いてありますか。」

「腕時計や辞書が置いてあります。」

日本語教育の現場では、(1a)と(1b)の相違を初級の学習者に説明する際、机の上においてあるものが、「腕時計」と「辞書」だけであることを伝える場合には(1a)を用い、机の上に置いてあるものが「腕時計」と「辞書」以外にも存在することをほのめかす場合には、(1b)を用いるという説明がなされることが多い。このような説明は、生田目、寺村が提示する「と」、「や」の機能についての説明とほぼ一致する。

しかしながら、市川、安藤が指摘するように「や」が用いられる表現例の中には、生田目や寺村の説明に合致しないものも存在する。市川、安藤が「{|と vs. や| = {|すべて列挙 vs. 一部列挙|}」という図式に当てはまらないものとしてあげている表現例は、次の(2)、(3)のようなものである。

- (2) a. 日本人は正月に神社とお寺に行く。 (市川の(2))
b. 日本人は正月に神社やお寺に行く。 (市川の(2)')
- (3) a. 経済危機によって多くの会社と工場が倒産することにつれて、失業率が高くなった。 (安藤の(4))
b. 経済危機によって多くの会社や工場が倒産し、それにつれて失業率が高くなった。 (安藤の(4)の訂正列)

(2a)、(3a)は、いずれも日本語学習者の作文によるものであり、ある資格をもつものすべてを列挙するという意図のもとで「と」が用いられているが、文脈的には、「と」よりも「や」の方が自然であると考えられる表現例である。市川、安藤は、このような言語事実より、「や」には「と」と同じく「すべて列挙」の機能を有するものが存在するとしたのである。

しかしながら、「すべて列挙」の「や」の機能については、市川、安藤いずれの分析にも問題が残る。

まず、市川 (p. 74) は、「すべて列挙」の「と」と「や」の相違について、以下の五つの点をあげているが、このうち1), 2), 5) は「すべて列挙」の「と」、「や」の各々が出現しやすい文環境を示したものであって、両者の機能的相違について言及したものではない。

- 1) 「や」で結ばれる語は特定のものが多い。
- 2) 「と」は独立的、「や」は述語への依存度が強い。
- 3) 「と」は格助詞的、「や」はムードの助詞的 (間投助詞的、とりたて助詞的)。
- 4) 「と」は厳密、「や」はおおざっぱ、全体的 (その例は例を言うためではなくその状況を言うためのもの)
- 5) 「と」は新情報的、「や」は旧情報的。

また、3)は、文法範疇の相違についての、4)は、「と」、「や」が使用されて

いる表現に対する印象の相違についての言及であって、これらについても機能的相違についての言及とはみなしがたい。

次に、安藤は、「すべて列挙」の「や」は、並立要素が共通に属する集合をイメージさせる機能を持つのにに対し、「と」はこのような機能を持たないとしており、次の(4a)においては、「や」は「親」と対照される「子供」という一つの集合をイメージさせるとしている (p. 47)。

- (4) a. 彼らは、娘や息子のことを心配している。 (安藤の(19a))
- b. 彼らは、娘と息子のことを心配している。 (安藤の(19b))

しかしながら、(4)の場合、並立要素の「娘」、「息子」という語対は、一般的に「子供」の下位概念として認識されている語対であり、「子供」という一つの集合イメージは、(4a)だけでなく(4b)についても喚起される。従って、(4)では、「や」が、並立要素が共通に属する集合をイメージさせる機能を持つかどうかを確認することができない。

以上、「と」と「や」の相違を「すべて列挙」と「一部列挙」の相違とする先行研究、「すべて列挙」の「や」の存在を指摘し、「すべて列挙」の「と」と「すべて列挙」の「や」の相違について分析している先行研究を見てきたが、これらとはやや異なる視点で「と」と「や」の相違を捉えている先行研究に吉井があげられる。

吉井は、「と」と「や」の相違を示す概念として「一体性」と「個別性(離散性)」という概念を提示し、「や」は「個別性」が高いため、次の(5a)のような言い方が可能であるが、「と」は「一体性」が強いため、(5b)は不適切になるとしている (p. 52)。

- (5) a. 保険に入れば夫が病氣や交通事故で死んでもすぐには困りません。 (吉井の⑥ a)
- b. *保険に入れば夫が病氣と交通事故で死んでもすぐには困りません。 (吉井の⑥ b)

(5)では、死んでも困らない場合の夫の死因として「病氣」と「交通事故」の二つがあがっているが、これらは、ともに同じ人間の死に関与するものとしてあげられているわけではなく、異なる人間の死に個別的に関与するもの

としてあげられている。従って、(5b)が不自然である理由は、確かに、「{と vs. や} = {一体性 vs. 個別性 (離散性)}」という図式によって説明することができる。

しかしながら、この図式は「と」、「や」で列挙される並立要素とこれと関わる他の成分との対応関係を示したものであって、「と」、「や」の機能的相違を示したものではない。また、この図式では「すべて列挙」の「や」と「一部列挙」の「や」が区別されておらず、両者の相違点が明確ではない。

以上、並立助詞の「と」と「や」の相違について考察している先行研究を取り上げ、問題点を指摘してきた。次の3からは、以上の先行研究をふまえて、「と」と「や」の機能的相違について考察していく。

3. 「すべて列挙」の「と」、「や」の機能的相違に関する仮説

市川、安藤により、「{と vs. や} = {すべて列挙 vs. 一部列挙}」という図式に問題のあることが明らかとなったが、「と」が「すべて列挙」に用いられ、「一部列挙」には用いられないという考え方自体は否定されたわけではない。問題なのは、「や」が「一部列挙」に用いられ、「すべて列挙」には用いられないという考え方である。

2では、「すべて列挙」の「や」が用いられている表現例として、(2b), (3b), (4a), (5a)をあげたが、このような「すべて列挙」の「や」が用いられている表現例には(4a)のように「と」に置き換えが可能なものと、(2b), (3b)のように「と」に置き換えるとやや不自然になるものと、(5a)のように「と」に置き換えると不自然さが増すものがある。

また、(2b)については、「と」で列挙されている要素と「や」で列挙されている要素とでは主語との結びつき方が異なる。「と」で列挙された(2a)の「神社」、「お寺」は、どちらも主語の「日本人」のいずれもが「行く」場所として解され、(2b)の「神社」、「お寺」は、「日本人」の中の異なる部分集合が「行く」場所として解される。

このような「と」と「や」の表現性の相違は、以下に示すような「すべて列挙」の「と」と「や」の機能的な相違に大きく起因している。

「すべて列挙」の「と」と「や」の機能的相違に関する仮説

「すべて列挙」の「と」は、並立要素の総和集合に、並立要素と「と」からなる成分の構文的意味¹⁾を付与する。

「すべて列挙」の「や」は、並立要素をすべての具体例とする類包含カテゴリに、並立要素と「や」からなる成分の構文的意味を付与する。

次の4では、「一部列挙」としてではなく「すべて列挙」の「や」として解されやすい表現例を観察しながら上記の仮説の妥当性を検証していく。

4. 仮説の検証

4-1 複数主体を表す主語をとる文中に現れる「や」

「すべて列挙」の「や」が現れやすい文には以下のような特徴を持った文がある。

- ①複数主体を表す主語をとる文
- ②継続事象を表す文
- ③条件を表す文

ここでは、まず①の複数主体を表す主語をとる文中に現れる「すべて列挙」の「や」について考察し、次の4-2では②の継続事象を表す文中に現れる「すべて列挙」の「や」について考察し、4-3では③の条件を表す文中に現れる「すべて列挙」の「や」について考察する。

①の複数主体を表す主語をとる文中に現れる「すべて列挙」の「や」の表現例には、先にあげた(2b)、(4a)や次の(6)－(8)のような表現例が存在する。

(6)ただし、拝観料に税額を上乗せしたのに対し、いくつかの社寺は拝観停止や無料拝観で抵抗。(天声人語2000.2.16)

(7)高卒者の多くは、大学や短大や専門学校に進学する。

(8)うちの近所の人たちはみな犬や猫を飼っている。

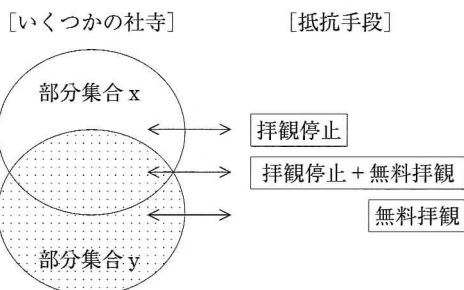
1) 本稿における構文的意味とは、文中において他の成分との意味関係により特徴づけられるある特定の成分の意味のことをいう。

これらの表現例においては、「や」で列挙されている並立要素の各々は、主語が表す複数主体の異なる部分集合に関与している。

例えば、(6)の場合、並立要素の「拝観停止」、「無料拝観」は、主語すなわち「いくつかの社寺」のいずれもが用いている抵抗手段ではなく、「いくつかの社寺」の異なる部分集合が用いている抵抗手段に相当する。

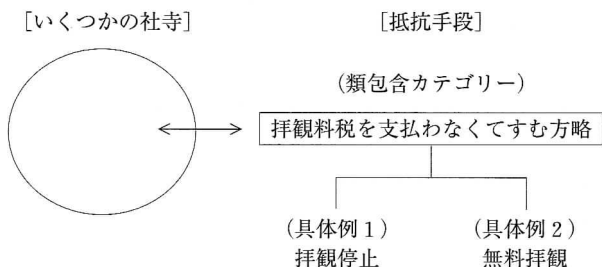
(6)における複数主体と並立要素との関係を図示するならば、以下のようになるであろう。

図1 (6)の複数主体と並立要素との関係図1



(6)において、上記のような解釈が成立するのは、仮説に示した「や」の働きにより、並立要素の「拝観停止」、「無料拝観」をすべての具体例とする「拝観料税を支払わなくてすむ方略」といった類包含カテゴリーに、「いくつかの社寺が抵抗するのに用いた手段」という構文的意味が付与されたためであるとみることができる。すなわち、図1に示したような複数主体と並立要素との関係は、次の図2のような関係図から導かれている。

図2 (6)の複数主体と並立要素との関係図2

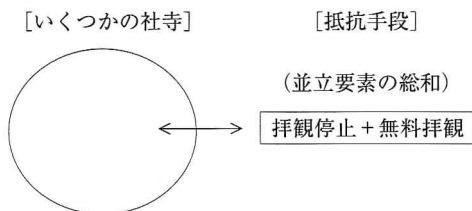


一方、「すべて列挙」の「と」には、「や」のような、並立要素をすべての具体例とする類包含カテゴリーに、並立要素と「や」からなる成分の構文的意味を付与するという機能は存在せず、並立要素の総和集合に、並立要素と「と」からなる成分の構文的意思を付与するという機能が存在する。

従って、(6)の「や」を次の(6')のように「と」に置き換えると「と」で列挙される並立要素の「拝観停止」、「無料拝観」は「いくつかの社寺」と図3のように関係づけられることになる。

(6') ?ただし、拝観料に税額を上乗せしたのに対し、いくつかの社寺は
拝観停止と無料拝観で抵抗。

図3 (6')の複数主体と並立要素との関係図



従って、この場合「いくつかの社寺」のいずれもが抵抗手段として「拝観停止」と「無料拝観」の両方の方略を用いていると解されることになるが、このような解釈は、私たちが所持する社会通念とは合致しない。(6')の不自然さは、このような理由に起因するものと考えられる。

以上、①の特徴をもつ文に現れる「すべて列挙」の「や」の働きを(6)を例に見てきたが、(2b)、(4a)、(7)、(8)についても、(6)とほぼ同様の説明が可能となる。ただし、(4a)の「や」を「と」に置き換えた(4b)や、(8)の「や」を「と」に置き換えた次の(8')については、「や」は(6')ほど不自然ではない。

(8') うちの近所の人たちはみな犬と猫を飼っている。

これは、「と」の使用により導かれる解釈と私たちの社会通念との間のずれが(6')ほど大きくないためであると考えられる。

4-2 継続事象を表す文中に現れる「や」

②の継続事象を表す文中に現れる「すべて列挙」の「や」の表現例には、以下の(9)－(11)がある。

(9) 太郎は、いつも放課後に家の近くのグラウンドで友達と野球やサッカーをする。

(10) 彼女は、休みがとれると海外旅行や国内旅行に出かける。

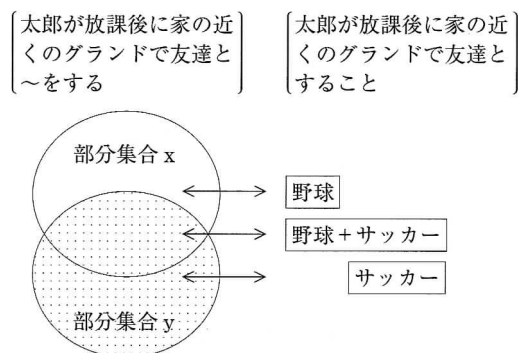
(11) 彼は、学生時代、毎日コンビニや居酒屋でバイトをしていたそうだ。

これらの表現例においては、「や」で列挙される並立要素の各々は、文が表す継続事象の異なる部分集合に登場する。

例えば、(9)の場合、並立要素の「野球」、「サッカー」は、継続的な「太郎が放課後に家の近くのグラウンドで友達と～をする」という事象の異なる部分集合に登場する。

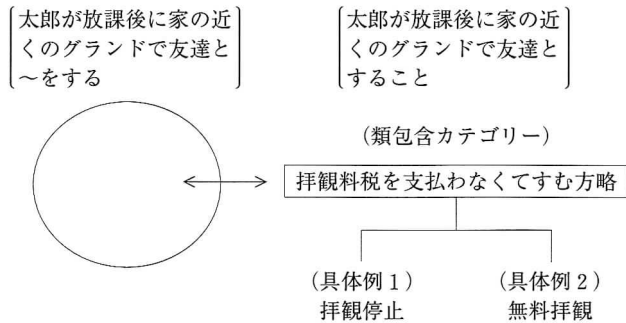
(9)における継続事象と並立要素との関係を図示すると、以下のようになる。

図4 (9)における継続事象と並立要素との関係図1



これは、仮説に示した「や」の働きにより、並立要素の「野球」、「サッカー」をすべての具体例とする「子供たちに人気のあるスポーツ」といった類包含カテゴリーに、「太郎が放課後に家の近くのグラウンドで友達とすること」という構文的意味が付与されたためであるとみることができるとすなわち、図4に示したような継続事象と並立要素との関係は、次の図5のような関係図から導かれている。

図5 (9)における継続事象と並立要素との関係図2

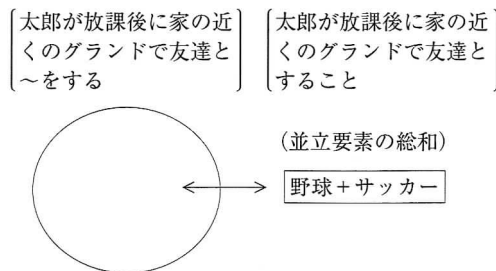


しかしながら、この「や」を「と」に置き換えた次の(9')では、「野球」,
「サッカー」は、いずれも継続的な「太郎が放課後に家の近くのグラウンドで友
達と～をする」という事象に毎回登場する要素として解される。

(9')太郎は、いつも放課後に家の近くのグラウンドで友達と野球とサッ
カーをする。

「や」を用いた場合と比較するために(9')の継続事象と並立要素との関係を
図示すると次の図6のようになる。

図6 (9')の継続事象と並立要素との関係図



これは、仮説に示した「と」の働きにより、並立要素の「野球」,
「サッカー」の総和集合に、「太郎が放課後に家の近くのグラウンドで友達とすること」
という構文的意味が付与されたためであるとみることができる。

以上、②の特徴をもつ文中に現れる「すべて列挙」の「や」の働きを(9)を
例に見てきたが、(10)、(11)についても、(9)とほぼ同様の説明が可能となる。

4-3 条件を表す文中に現れる「や」

③の条件を表す文中に現れる「すべて列挙」の「や」の表現例には、(3b), (5a)や以下の(12), (13)がある。

(12)集中的ストレスは、しばしば脳梗塞の引き金になる。糖尿病や動脈硬化があれば、危険度は増す。(天声人語2000.4.4)

(13)判決が確定せず、高裁や最高裁でさらに公判が続いたとしても、被告は拘置所からではなく、自由の身で裁判所に通える。

(天声人語2000.12.23)

なお、これらのうち(3b)は順接確定条件を表し、(12)は順接仮定条件、(5a), (13)は逆説仮定条件を表している。

これらの表現例においては、主文の表す結果は、並立要素が個別的に登場する条件と関係づけられたり、並立要素が個別的に登場する条件とセットで登場する条件の両方と関係づけられたりする。

例えば、(12)の「危険度は増す」は、「糖尿病」,「動脈硬化」が個別的に登場する「糖尿病だけがある」,「動脈硬化だけがある」という条件と、「糖尿病」,「動脈硬化」がセットで登場する「糖尿病と動脈硬化の二つがある」という条件の両方と関係づけられている。(12)における条件と結果との関係を図示すると以下の図7のようになる。

図7 (12)における条件と結果との関係図

[条件]	[結果]
糖尿病だけがある	→○ 危険度は増す
動脈硬化だけがある	→○ 危険度は増す
糖尿病と動脈硬化の二つがある	→○ 危険度は増す

これは、仮説に示した「や」の働きにより、並立要素の「糖尿病」,「動脈硬化」をすべての具体例とする「血管の病気」といった類包含カテゴリに、「脳梗塞の危険度を増加させる要因」という構文的意味が付与されたためであるとみることができる。しかしながら(12)の「や」を「と」に置き換えた次の(12')では、並立要素がセットで登場する条件とだけ関係づけられる。

(12')集中的ストレスは、しばしば脳梗塞の引き金になる。糖尿病と動脈硬化があれば、危険度は増す。

(12')における条件と結果の関係を図示すると以下の図8のようになる。

図8 (12')における条件と結果との関係図

〔条件〕	〔結果〕
糖尿病だけがある	→× 危険度が増す
動脈硬化だけがある	→× 危険度が増す
糖尿病と動脈硬化の二つがある	→○ 危険度が増す

これは、仮説に示した「と」の働きにより、並立要素の「糖尿病」、「動脈硬化」からなる総和集合に「脳梗塞の危険度を増加させる要因」という構文的意味が付与されたためであるといえることができる。

以上③の特徴を持った文中に現れる「や」の働きを、(12)を例に見てきたが、(3b)、(5a)、(13)についてもほぼ同様の説明があてはまる。

5. 「すべて列挙」の「や」と「一部列挙」の「や」の機能的接点

4では、具体例を観察しながら「すべて列挙」の「と」と「や」の間に3の仮説に示した機能的相違が存在することを見てきた。

一方、「一部列挙」の「や」には、「すべて列挙」の「と」と「や」の各々の機能と対照的な関係にある次のア、イの二つの機能が存在する。

ア 並立要素とそれ以外の非明示要素からなる総和集合に、構文的意味を付与する。

イ 並立要素を一部の具体例とする類包含カテゴリーに、構文的意味を付与する。

アは「すべて列挙」の「と」と、イは「すべて列挙」の「や」と対照的な関係にあり、文中に現れた「一部列挙」の「や」が、ア、イのいずれの機能を果たすものとして解されるかは、文脈、場面、聞き手の背景知識などの影響を受ける。

例えば、次の(14)の「ニンジン」、「ジャガイモ」は、文脈により「花子がスーパーで買ったもの」という構文的意味が付与された総和集合の構成素の一部として解されたり、「花子がスーパーで買ったもの」という構文的意味が付与された「根菜類」という類包含カテゴリーの具体例の一部として解されたりする。

(14) 花子はスーパーでニンジンやジャガイモなどを買った。

また、「すべて列挙」の「や」として解されるか「一部列挙」の「や」として解されるかもやはり文脈、場面、聞き手の背景知識などの影響を受ける。

例えば 4-3 で「すべて列挙」の「や」を用いた表現例としてあげた (12) の「糖尿病」、「動脈硬化」は、聞き手の背景知識の相違により、「一部列挙」の アもしくは イの機能を果たす「や」として解されたりすることもあるであろう。

さて、本題の「すべて列挙」の「や」と「一部列挙」の「や」の機能的接点であるが、「すべて列挙」の「や」と「一部列挙」の「や」は、前者の並立要素が類包含カテゴリーの具体例に相当し、後者の並立要素が総和集合もしくは類包含カテゴリーの部分例に相当しているという点においてともに例示機能を有している。

橋本 (1969)、松尾 (1969)、此島 (1973) によれば、並立助詞としての機能を持つ「や」は、すでに上古に存在していた並立助詞の「と」に遅れ、中古に次の (15)、(16) ような間投助詞の「や」から派生し、院政鎌倉時代に確立したということである²⁾。

(15) みな人は蝶や花やといそぐ日も (枕草子)

(16) わりごやなにやとこなたにも入れたるを (源氏物語・宿木)

(15)、(16) の「や」は引用句の句末に現れており、句末の間投助詞としての性格を有しているものの、ものごとを例示する表現において使用されている。

このような表現例の存在を考慮するならば、並立助詞の「や」はこのような表現の使用により例示の機能を獲得していったものと考えられる。

2) 此島 (1973: p. 223) には中古に用いられた並立助詞「や」の表現例として以下のような表現例があげられている。

(i) 雨や風なほやまず (蜻蛉日記・中)

(ii) うへや中の君おはする所に入れ奉り給ふ (落窪・二)

6. ま と め

本稿においては、まず「すべて列挙」の「と」と「や」の機能的相違について仮説を立て、具体例を観察しながら仮説の妥当性を検証した。その結果、「すべて列挙」の「と」と「や」の間に仮説に示したような機能的相違が存在することが明らかとなった。

次に、「すべて列挙」の「や」と「一部列挙」の「や」の機能的接点について考察を行った。

本稿仮説中の「すべて列挙」の「や」の説明で使用した「並立要素をすべての具体例とする類包含カテゴリー」が表す概念は、安藤が「すべて列挙」の「や」の説明に用いた「並立要素が共通に属する集合」が表す概念に近い。

しかしながら、本稿では、「並立要素をすべての具体例とする類包含カテゴリー」に、「や」と並立要素からなる成分の構文的意味を付与するという機能をあげたのに対し、安藤では、「並立要素が共通に属する集合」に、「や」と並立要素からなる成分の構文的意味を付与するという機能はあげていない。

本稿では、このような機能をあげたことにより、「すべて列挙」の「と」と「や」の表現性の相違を明確にすることが可能となった。

なお、「すべて列挙」の「と」については、さらに、次の(17)のように互いに相対する関係にある要素を列挙するものと(18)のように相対する関係にはない要素を列挙するものとに下位分類することができる。

(17) 太郎と花子は互いににらみあった。

(18) 太郎と花子は私を励ましてくれた。

本稿では、並立助詞の「と」、「や」を考察対象としたが、並立助詞の中には、これらと派生関係にある「とか」、「やら」といったものも存在する。これらの語が持つ機能、ならびにこれらの語が派生する過程については今後の研究課題とする。

参 考 文 献

- 安藤淑子 (1995) 「日本語の名詞及び動詞における並立表現の構造—開いた系と閉じた系—」 広島大学教育学部日本語教育学科編『広島大学日本語教育学科紀要』 5
安藤淑子 (2001) 「中級レベルの作文に見られる並立助詞『や』の問題点—『と』の用

- 法との比較を通して―」日本語教育学会編『日本語教育』108
- 市川保子（1991）「並立助詞『と』と『や』に関する一考察」筑波大学文芸・言語学系編『文藝言語研究 言語篇』20
- 此島正年（1973）『国語助詞の研究 助詞史素描』桜楓社
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 生田日弥寿（1988）「名詞の並列」国際学友会編『国際学友会日本語学校紀要』12
- 橋本進吉（1969）『助詞・助動詞の研究（講義集三）』岩波書店
- 松尾 拾（1969）「十二 や 一格助詞―〈古典語・現代語〉」松村明編『古典語現代語 助詞助動詞詳説』學燈社
- 吉井 健（1989）「体言の並立について」大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会編『文学史研究』30